

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：12613

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A)）

研究期間：2020～2022

課題番号：19KK0332

研究課題名（和文）スウェーデンにおける初期女性職業教育とジェンダー秩序の変容—手工芸領域を中心に

研究課題名（英文）Vocational education for women and the shift of the gender order in Sweden:
Focusing on the craft movement in the late 19th century.

研究代表者

太田 美幸 (OHTA, Miyuki)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：20452542

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,400,000 円

渡航期間： 9ヶ月

研究成果の概要（和文）：スウェーデンでは1960年代以降の制度改革がジェンダー秩序の劇的変容をもたらしたとみなされ、その要因として女性運動の高い組織率と社会的影響力があったことが指摘されてきた。本研究の基課題「スウェーデン女性運動の比較発達社会史的研究」（2019～2023年度、19K02524）は、スウェーデンの女性運動が強い影響力を持ちえた背景および人々の性別役割意識の変容の進行過程を解明することを目的としているが、本研究では特に19世紀後半における女性たちの家庭外での活動領域と役割意識の変容過程に注目し、手工芸運動にみられた女性活躍の背景要因を比較歴史分析の方法により解明することを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

スウェーデン国内の女性運動史をめぐる研究は社会民主主義運動史や労働運動史を中心に蓄積されてきたが、近年はそうした研究の思想的偏りが批判され、女性による運動をより広い範囲で把握することが主張されている。他方、日本のジェンダー研究においてもスウェーデンへの関心は高いが、女性運動の展開をふまえたジェンダー平等化の過程が通史的に把握されてきたわけではない。歴史的に類似点が多いとも言われる両国の相違が生じた過程に注目した比較分析は、日本からの問題提起によってスウェーデン国内の研究の進展に寄与するとともに、日本におけるジェンダー平等の実現に示唆を与えうるものである。

研究成果の概要（英文）：In Sweden, a country advanced in gender equality, institutional reforms since the 1960s are considered to have brought about the dramatic shift of the gender order, and as its background it has been pointed out the broader women's movements. This research is part of the main study which aims to clarify the strong influence of the Swedish women's movements and the process of the shift of gender role consciousness, and has a particular focus on the changing process of women's activities outside the home in the late 19th century. The main field of the research is vocational education for women focused on household and handicrafts, and the handicraft movements which later became women-centered and one of the driving forces of the industrial development. Similar phenomena had been occurred also in Japan but it didn't promote women's participation and advancement. Using the method of comparative historical analysis, I investigated what factors caused the differences between Sweden and Japan.

研究分野：教育社会学

キーワード：スウェーデン ジェンダー 職業教育 手工芸運動 ノンフォーマル教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 F-19-2

1. 研究開始当初の背景

本研究は、基盤研究 (C)「スウェーデン女性運動の比較発達社会史的研究」(2019～2023 年度、19K02524) を基課題としている。ジェンダー平等先進国として国際的に注目を集めるスウェーデンでは 1960 年代以降の制度改革によってジェンダー秩序が劇的に変容したとみなされており、先行研究では制度改革の背景に女性運動の高い組織率と社会的影響力があったことが指摘されてきた。基課題の研究では、先行研究の知見をふまえ、スウェーデンの女性運動が強い影響力を持ちえた背景およびジェンダー秩序の変容に向けた人々の意識変容の進行過程を実証的に解明することを目的としている。とりわけ、家父長制的な「国民の家」構想のもとで福祉政策が進展した 1930～1950 年代および女性の労働市場参加が進んだ 1960 年代以降における女性たちの生活実態の変容に注目し、女性たちによって語られたライフヒストリー資料を分析してきたが、その作業を通じて、19 世紀後半以降の近代化過程において女性たちの社会的活動領域が徐々に拡がり、それが 20 世紀前半以降のジェンダー秩序の変容の素地を準備していたことが確認され、この時期の女性たちが家庭の内外で従事していた労働や担っていた社会的役割の実態をふまえたうえで女性たちの意識の緩やかな変容過程 (女性の居場所を家庭に限定する価値観 (ドメスティック・イデオロギー) の克服の端緒) を把握することが、重要な課題として認識されるに至った。

2. 研究の目的

19 世紀後半はスウェーデンにおいても農業社会から工業化社会への移行期にあり、農業労働力であった女性たちの新たな役割が模索されるとともに、女性の権利獲得に向けた運動が徐々に起こっていた時期である。当時の女性運動史をめぐる研究成果は社会民主主義運動史、労働運動史を中心に蓄積されてきたが、近年はそうした研究の思想的偏りが批判され、女性による運動をより広い範囲で把握することが主張されている (Andersson 2010)。他方、女性教育に注目する教育史研究では、女性運動において自立のための教育が切実に求められたこと、その成果として高等教育への入学資格や男女平等教育が実現したことなどが具体的に明らかにされてきた。なかでも、農村部のノンフォーマルな教育機関である民衆大学における職業教育の実態を解明したルンド=ニルソンらの研究では、1880 年代以降に女性向けの職業教育コースが多く開講され始め、そこでは裁縫、織物、手工芸など伝統的な家庭内女性労働の技術が教えられていたことが明らかにされている (Lundh Nilsson & Nilsson 2010)。スウェーデンでは、ノンフォーマルな民衆教育機関での女子職業教育の導入とほぼ同時期に、農村女性の経済的自立を目指す「ヘムスロイド (手工芸) 運動」が活発化し、この領域における女性たちの活躍が 20 世紀の近代工芸運動や近代デザイン産業の国際的な成功に大いに貢献してきたことが指摘されている (Rosenqvist 2007)、この運動の成功は女子職業教育の展開とも密接に関連していたと考えられる。

19 世紀後半に各国で導入された女子職業教育の多くは家政や手工芸の技術を教えるものであったが、産業化の進展による手仕事の衰退や良妻賢母規範との二律背反的な状況により、こうした教育の成果は必ずしも女性の職業的自立につながらなかった。明治初期の日本においても、料理や洗濯、裁縫などの家事、および養蚕や製糸などの女性労働に関する知識を教える教科として「手芸」が女子教育に組み込まれたが、それらは職業技術教育というよりは、むしろ女性に不可欠な「徳」を育成するものとみなされていた (山崎 2005)。日本では現在もなお、女性による手工芸は趣味的なものとみなされ、賃労働とは区別されることが多い。家庭外で手仕事に従事する女性たちは古くから存在したが、ほとんどが男性職人の下働きで (大谷 1975)、その労働は長らく不可視化・周縁化されてきた (池田 2019)。本研究ではこうした先行研究の知見をふまえ、日本とスウェーデンにおける初期の女子職業教育の実態をより大きな社会的文脈のなかで把握すること、およびその後のジェンダー秩序の変容過程を比較歴史分析の手法を読み解くことを目指した。

3. 研究の方法

19 世紀末から 20 世紀前半のスウェーデンにおける女性職業教育と女性の職業的自立を目指して展開した運動（すなわち手工芸運動）の実態を、日本との比較の観点から解明するにあたってまず注目したのは、フォーマルな教育機関に先駆けて女性のための職業教育コースを設置してきたノンフォーマルな民衆教育機関、とりわけ各地の農村に設立された民衆大学 (folkhögskola) である。民衆大学の職業教育コースは現在もなお、手工芸をはじめとする「文化的な仕事」や、看護・介護などケアにかかわる「福祉的な仕事」を対象とするものが多く (Landström 2004)、女性による家庭外賃労働の主要領域が一貫して反映されてきたと言える。そこで、19 世紀末から 20 世紀前半にかけての民衆教育機関における女性向け職業教育とそこでの学習活動の実態を同時期の日本の状況との比較の観点から分析することを、本研究の第一の作業課題とした。

19 世紀末の日本では、イギリスの女子教育を視察した下田歌子を中心に女性労働に向けた教育の必要性が認識され、1899 年に実践女学校、実践女学校附属慈善女学校、女子工芸学校、女子工芸学校附属下婢養成所が開校し、中産階級および労働者階級の女子に対して手工芸や家事労働の技術が教えられたが、これらの教育機関は女性労働を重視しつつも、その内実としてはドメスティック・イデオロギーの強化を志向するものであったことが指摘されている (山崎 2005)。他方、スウェーデンでは、農村各地の民衆大学で 1880 年代以降に開講されるようになった職業教育コースにおいて、農村若年女性を対象に、農家の家事や裁縫、織物など、女性が家庭内で担ってきた労働に関わる技術が教えられたが (Lundh Nilsson & Nilsson 2010)、同時期の農村社会では、農村経済の安定化を目指して活動していた農村家政振興協会や、これと連携しながら手工芸技術による女性の経済的自立を目指して活発化したヘムスロイド (手工芸) 運動などが活発化しており、女性職業教育とこれらの運動とは相互に影響を与え合っていた。そこで、本研究の第二の作業課題として、こうした運動の展開過程を比較検討し、当時の状況にジェンダー秩序変容の兆しがどのように現れていたのかを探った。

これらの作業から明らかになったのは、女子教育における職業教育の目的やカリキュラムの内実は両国間にさほど大きな違いはなかったことである。また、手工芸が伝統文化保護の文脈で手工芸の振興が目指されるなかで、その担い手として「母性」をもつ女性に期待を寄せる保守的規範があったことも両国に共通していた。ただし後者については、女性が担う手工芸が日本では職業と結びつかなかったのに対して、スウェーデンでは専門的職業として確立され、以後の産業発展に大きく貢献した。このことは、日本における手工芸の振興 (民藝運動や農民美術運動、あるいは商工省が設置した工芸指導所等) に参画したのは専ら男性のみであったのに対して (池田 2019 ほか)、スウェーデンにおける手工芸復興運動 (ヘムスロイド運動) は、農村女性の経済的自立を目指して女性たち自身が主導する運動として展開されたこととも関連している。したがって、手工芸運動の展開においてこうした相違をもたらした要因を探ることが本研究の最終的な課題として浮かび上がった。

そのために採用したのは、個別の状況を把握しつつ体系的に比較することでより厳密な因果関係を説明しようとする比較歴史分析の方法である。この方法は決定的な因果推論を導くものではないが、過程追跡法と体系的重点比較法を組み合わせることにより、類似する複数の事例において観察される結果の差異がいかなる変数によってもたらされたものなのかを推論でき、因果仮説を精緻化することが可能である (ジョージ & ベネット 2005=2013)。本研究では、過程追跡 (因果プロセス観察) として事例内分析をおこなったうえで、事例間比較によって説明変数を検討し因果仮説の生成を試みた。具体的には、スウェーデンのヘムスロイド運動についての歴史研究の蓄積をもとに因果仮説とみなしうるものを抽出し、日本との比較をおこないながらそれらの妥当性と論点を確認した。

4. 研究成果

スウェーデン国内における主要な因果仮説として注目されてきたのは、①ヘムスロイドに対する国家支援、および②農村における女性労働力の余剰化が女性による運動の発展をもたらしたという見解であるが (Danielsson 1991)、日本にも同様の事象は存在しており、上記 2 点は結果の違いを説明しうる変数とはなりえない。そこで、③両国における女性の役割についての言説とその文脈の違いを検討したが、ここでも、ヘムスロイドが伝統的な女性役割に結びつくものであったからこそ女性が公的空間で活動するための足掛かりになったという仮説は結果の相違を十分に説明しえないことが確認された。仮説として最後に残ったのは、④ナショナリズムを背景とする社会連帯の醸成と、それに密接に関係する④女子教育の展開過程という二つの変数である。両国の女子教育の展開を比較した結果、スウェーデンでは市民社会の連帯のもとで展開されたノンフォーマル教育 (支配に抗する自律的な公的空間としての民衆大学) が、ヘムスロイドに携わる女性たちの学習にとって (技術向上だけでなく、集団的アイデンティティの育成にとっても) きわめて重要な意味をもち、それが各地のヘムスロイド協会における女性の活動を説明する有力な変数となりうることが推論された。

すなわち、ノンフォーマルでありながら地域社会における公的領域でもあった民衆大学の特徴が女性たちの能力を向上させ、公的領域で自律的に活動することを可能にした。民衆大学における女子スロイド教育は、保守的な思想にもとづく女性への期待が性役割の固定化という経路をたどらず、別の経路がつくりだされた要因の一つとなったといえるが、こうした潜在力をもつ教育空間は、日本の女子教育において広範には存在しなかった。

上記のとおり、スウェーデンにおいては 20 世紀前半に至る過程で、労働市場以外の領域における女性の参加と権利行使を可能にする主体形成が進行していた。このことは、ジェンダー秩序の変容をはじめとする社会変容の原動力として、市民社会の連帯のもとで展開されるノンフォーマル教育が一定の役割を果たしうることを示唆している。

当初の予定では、2021 年2月から8月までストックホルム市の国立美術工芸大学に拠点を移し、工芸教育の歴史に精通するサーラ・クリストフフェション教授の協力を得て研究を進める予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため課題設定と研究計画を縮小せざるを得ず、国立美術工芸大学における滞在は断念することになった。そのため、2月以降も引き続きリンシェーピング大学に滞在したのち、新型コロナウイルス感染状況と勤務校の事情を勘案して 5 月末に帰国した。リンシェーピング大学では、同大学図書館および行動科学研究所が収集・保存してきた膨大な民衆教育史資料の調査に注力することで一定の成果を得ることができた。研究成果をまとめる作業は帰国後も継続しておこなった。

Andersson, I. (2010) *Vi Kvinnor och Vi Män 1947-2009*, SKV.

Danielsson, Sofia (1991) *Den goda smaken och samhällsnyttan. Om handarbetets vänner och den svenska hemslöjdsrörelsen*, Nordiska museet.

Landström, I. (2004) *Mellan samtid och tradition*, Linköpings universitet.

Lundh Nilsson, F. & Nilsson, A. red. (2010) *Två ssidor av samma mynt?*, Nordic Academic Press.

Rosenqvist, Johanna (2007) *Könsskillnadens estetik? Om konst och konstskapande i svensk hemslöjd på 1920- och 1990-talen*, Nordiska museet.

ジョージ, A. L. & ベネット, A. (2005=2013) 『社会科学のケース・スタディ:理論形成のための定性的手法』勁草書房。

山崎明子 (2005) 『近代日本の「手芸」とジェンダー』世織書房。

大谷晃一 (1975) 『手仕事のおんな』朝日新聞社。

池田忍 (2019) 『手仕事の帝国日本』岩波書店。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 太田美幸	4. 巻 —
2. 論文標題 スウェーデンの成人教育機関コムブクス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育新聞	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 太田美幸	4. 巻 —
2. 論文標題 スウェーデンの性教育とユースクリニック	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育新聞	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 太田美幸	4. 巻 61
2. 論文標題 書評 長谷川紀子著『ノルウェーのサーム学校に見る先住民族の文化伝承：ハットフェルダル・サーム学校のユニークな教育』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較教育学研究	6. 最初と最後の頁 214-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Miyuki Ohta	
2. 発表標題 Konsordningen i hantverksrorelsen och dess omvandling: En jämförande historisk analys mellan Sverige och Japan med fokus på icke-formell utbildning	
3. 学会等名 Mimers forskarkonferens 2021（国際学会）	
4. 発表年 2021年	

1. 発表者名 太田美幸
2. 発表標題 日瑞の近代手工芸運動と女子教育：比較歴史分析の試み
3. 学会等名 北欧教育研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 太田美幸	4. 発行年 2023年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 216
3. 書名 スヴェンスカ・ヘムの女性たち	

1. 著者名 中田 麗子、佐藤 裕紀、本所 恵、林 寛平、北欧教育研究会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 272
3. 書名 北欧の教育再発見	

1. 著者名 北欧教育研究会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 248
3. 書名 北欧の教育最前線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ノルドヴァル ヘンリック (Nordvall Henrik)	リンシェーピング大学・行動科学研究所・教授	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
その他の研究協力者	ラインデル アンマリー (Laginder Ann-Marie)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------